

相手の話を能動的に聞く力を育てる国語科学習指導の工夫 —「聞くこと」に焦点化してタブレット型端末を活用する単元づくりを通して—

呉市立宮原小学校 下畦 恵美子

研究の要約

本研究は、相手の話を能動的に聞く力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「相手の話を能動的に聞く力」を、聞き手が、相手の話を聞きながら、話を聞く目的や話題、聞く視点と、話し手が話す内容とを対応させる内的フィードバックを繰り返し、併せて、話し手に確かめたり質問したりする外的フィードバックも繰り返しながら、話の内容を聞き取り、話の内容を捉え、その上で、感想や考えをもち、話し手に伝える力とした。この力を育てるために、「聞くこと」に焦点化した単元を計画し、タブレット型端末を活用して、繰り返し話を聞く、聞き方を振り返るという活動を取り入れ、授業を行った。同時に、タブレット型端末を活用した評価も行った。その結果、「聞くこと」に焦点化してタブレット型端末を活用する単元は、相手の話を能動的に聞く力を育てるのに有効であることが分かった。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（平成30年）では、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことが求められているとある⁽¹⁾。そのためには、相手の話を能動的に聞く力が重要であり、低学年の段階から確実に育成する必要がある。

小学校学習指導要領（平成29年告示）国語では、「聞くこと」の指導事項が、表1のように示されており⁽²⁾、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成30年、以下「29解説」とする。）では、話し手との関わりの下、「聞くこと」を通して、考えを形成する力を付けることが求められている⁽³⁾。

表1 「聞くこと」の指導事項⁽²⁾

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
エ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。	エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。	エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。

昨年度実施した総合学力調査での、所属校第2学年児童の「話の内容を聞き取る」ことを問う設問（多肢選択）の正答率は74.2%であった。この結果から、児童の聞く力について、話の内容を落とさずに聞く段階の力は概ね身に付けていると言える。し

かし、話の内容を捉えて感想をもつ段階の力をどの程度身に付けているかは把握できていない。

また、「聞くこと」の領域は研究自体が少なく、学習指導の開発が進んでいないとの指摘もある。その要因の一つとして、一回性である話し言葉の指導と評価の難しさがあると考ええる。

以上のことから、「聞くこと」において、聞き手から話し手に関わり、感想や考えを伝えるような能動的に聞く力の具体と、学習指導の在り方を明らかにする必要があると考え、本主題を設定した。

II 相手の話を能動的に聞く力とは

山本修（1994）は、相手の話を聞くことについて「話し手の意見を聞き、自分の考えをつくり出したり、話し手の言っていることを想像したりする能動的な行為」¹⁾であると述べている。

村松賢一（2004）は、コミュニケーションを送り手（話し手）と受け手（聞き手）が共同で意味を作り出す過程とし、次頁図1の「コミュニケーションの相互作用モデル」を示した⁽⁴⁾。そして、意味を作り出すために、送り手の意図と受け手の解釈を擦り合わせて意味をつくり出す外的回路と、自分の中で考えながら話す内的回路があると述べている⁽⁵⁾。

植西浩一（2015）は、話し・聴く活動はコミュニケーション行為であると同時に、思考活動であるとしている。話し手と聞き手それぞれが、自分、相手、自分の内の言葉を聴き、思考し、外に意味を生み出す営みであるとし、聞き手に焦点をあて、図2

の「聴くことの学習モデル（試案）」を示した⁽⁶⁾。

両者の共通点として、聞くことをコミュニケーションとして捉えている点と、聞いたことに基づいて思考し、意味を生成するとしている点が挙げられる。聞いたことに基づいて思考し、意味を生成する段階においては、聞き手の内側で起こるフィードバックと、相手に対して起こるフィードバックの二つがあり、この二つのフィードバックが繰り返されるとしている。

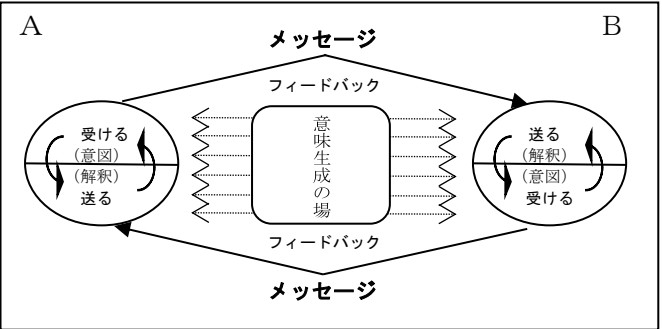


図1 村松の「コミュニケーションの相互作用モデル」⁽²⁾

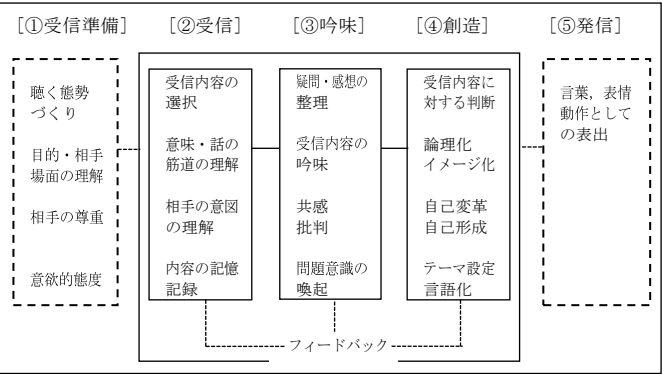


図2 植西の「聴くことの学習モデル（試案）」⁽³⁾

本研究では、聞き手の内側でのフィードバックを内的フィードバック、相手へのフィードバックを外的フィードバックとして研究を進めることとする。

以上のことから、相手の話を能動的に聞く力とは、聞き手が、相手の話を聞きながら、内的フィードバックを繰り返し、併せて、外的フィードバックも繰り返しながら、話の内容を聞き取り、話の内容を捉え、その上で、感想や考えをもち、話し手に伝える力であると定義する。研究の対象は低学年とし、能動的に聞く力の基礎を育てることを目指す。

Ⅲ 相手の話を能動的に聞く力を育てるために

1 話を聞く目的を意識させる

山元悦子（平成22年）は、聞く力として「目的に

応じて取捨選択しながら聞く力」⁽⁴⁾があるとしている。

何のために話を聞くのかという目的について、具体的には、「友だちのことを知り、より仲良くなるために話を聞く」ことが考えられる。また、この目的を達成するための方法として、話を聞いた後、「相手が嬉しくなるような感想を伝える」という活動を設定することができる。授業では、話を聞く目的と目的を達成するための方法を確認する場面を設け、意識させることで、目的に応じて聞く力を育てていく。

2 内的フィードバックを繰り返しながら聞く力を育てる

(1) 聞く視点と話の内容を対応させ、メモさせる

桂聖（2010）は、能動的に聞く状態をつくるために、「クイズトーク」を例に挙げ、話し手が、紹介しようとする物を聞き手に見せ、聞き手はその物について質問し、質問したことを視点として話を聞く活動を紹介している⁽⁷⁾。辻村敬三（2019）は、話の内容をメモすることについて、文脈を捉え、それを説明するために最低限必要な語を選ぶことが、聞くことのスキルの一つであると述べている⁽⁸⁾。

これらのことから、話の文脈を捉えるには、聞く視点が必要であり、聞く視点と話の内容を対応させ、メモしながら聞き取らせることが重要だと言える。そこで、第1学年及び第2学年の国語科の検定済教科用図書「聞くこと」の単元で、聞き取る内容としている具体を調べ、表2にまとめた。

表2 「聞くこと」（低学年）における聞き取る内容			
分類	聞き取る内容の具体		
話の内容	はじめに	つぎに	そして
	一つ目は	二つ目は	三つ目は
	いつ	どんなときに	なん時に
	どこに	どんなところで	
	だれと	だれに	
	なにが	なにを	
	どこが	どのような	どんな
	どうした	どうする	どうなる
話し手のこと	～から	どうしてかという	なぜ
	思い	気持ち	
			順序
			出来事
			考え

表2に示す聞き取る内容の具体を、聞く視点としてもたせ、話の内容と対応させることとする。

また、聞く視点に沿ったメモをさせるために、段階的に指導する。聞く視点をもって話を聞くことに慣れる段階では、図3に示す、事前に視点が記入してあるメモ用紙を使用する。慣れてきたら、聞き手

が、自分でメモ用紙に聞く視点を書き出して話を聞くようにする。

聞く視点をもたせ、聞く視点に沿ったメモをさせることで、聞き取るべきこと、聞き取れたことが明らかになり、内的フィードバックを促すと考ええる。

メモ用紙
もの こと いつ どこ だれ どうする どうなる どのような りゆう 気もち
の話

図3 メモ用紙

(2) 話の内容を再構成させる

Ⅲ 1 に示す、話を聞く目的を達成するためには、相手の話す内容の全体を捉えさせる必要がある。話の内容を聞き取った段階では、聞き手が、話の内容の全体を捉えているか、確かめることはできない。そこで、聞き取ったことに基づいて話の内容をまとめ、再構成させる。再構成する過程では、再度、内的フィードバックを促すことになる。

(1)(2)から、内的フィードバックを繰り返しながら聞く力を育てることができると考える。

3 外的フィードバックを繰り返しながら話の内容を捉え、感想を伝える力を育てる

(1) タイミングよく外的フィードバックをさせる

三浦和尚(2016)は、聞くことにおいて「わからないことは聞き直す」「質問をする」必要があると述べている⁽⁹⁾。

相手の話の内容を聞き取る際に、分からないことがあれば、話の途中であっても質問するなど、外的なフィードバックをする必要がある。そのためには、聞き手が、話のまとまりを捉えてタイミングよく話を止める必要がある。そこで、外的フィードバックの、良い例と悪い例のモデルを動画で提示し、適切なタイミングの理解を促す。併せて、目的や話題に応じた質問ができるようにする。また、聞き手に、自分の聞く姿を振り返らせることにより、適切なタイミングで、目的や話題に応じた質問ができているかを確認させ、改善、定着につなげていく。

聞き手から話し手に関わるということは、話の内容についてより詳しく聞き出すことにもつながり、

外的フィードバックを促すと考ええる。

(2) 再構成に基づいて感想を伝えさせる

辻村(2019)は、話の内容を再構成して共有、確認し、相手の言葉を引用して自分の考えを述べることで、聞く行為が質を高めるとしている⁽¹⁰⁾。辻村(2019)が述べる引用は、中学年以降の〔知識・技能〕の指導事項であるため、低学年の段階では、再構成に基づいて感想を述べることとする。そのためには、再構成した内容を話し手に確認し、聞き洩らしなどがあれば、話し手に質問させる。その上で、再度、再構成して確認させる。話の内容の捉えを確かなものにするために、話の内容を聞き取る段階よりも、重要な外的フィードバックになると考える。

安直哉(2019)は、「『感想』をもつには、話題に対する積極的な解釈が必要となる」⁵⁾としている。話を聞いた後、話し手が嬉しくなるような感想を伝えるという活動を意識させることが、話し手の話の内容に対する思いを解釈する切り口となり、話の内容に関わって、聞き手自身が、自分の体験を想起するなどしながら、感想の質を高めることができると考える。

(1)(2)から、外的フィードバックを繰り返しながら話の内容を捉え、感想を伝える力を育てることができると考える。

以上1, 2, 3に基づいて、「29解説」に示された「聞くこと」の学習過程に沿って⁽¹¹⁾、相手の話を能動的に聞いているイメージを、次頁図4に示す。

聞き手は、話を聞く前に、話を聞く目的と話題を把握し、聞く視点をもつ。そして、目的や話題、聞く視点と、話し手が話す内容とを対応させ、内的フィードバックしながら、話の内容を聞き取る。その過程で、聞き手は、聞き取った話の内容について、話し手に確かめたり質問したりするなど、外的フィードバックを行う。聞き手は、内的フィードバックを繰り返しながら、外的フィードバックも行いつつ、聞き取った話の内容について、納得、発見、共感などにたどり着き、話の内容を捉える。話の内容を捉えられているかどうかを確認するために、再構成を行い、その上で、感想や考えをもち、話し手に伝えることとなる。

なお、聞き手が、質問に対する話し手の応答について、更に疑問をもった場合には、続けて質問するなど、外的フィードバックを繰り返すこともあり得る。

図4に示す相手の話を能動的に聞いているイメージは、低学年から高学年まで共通する。

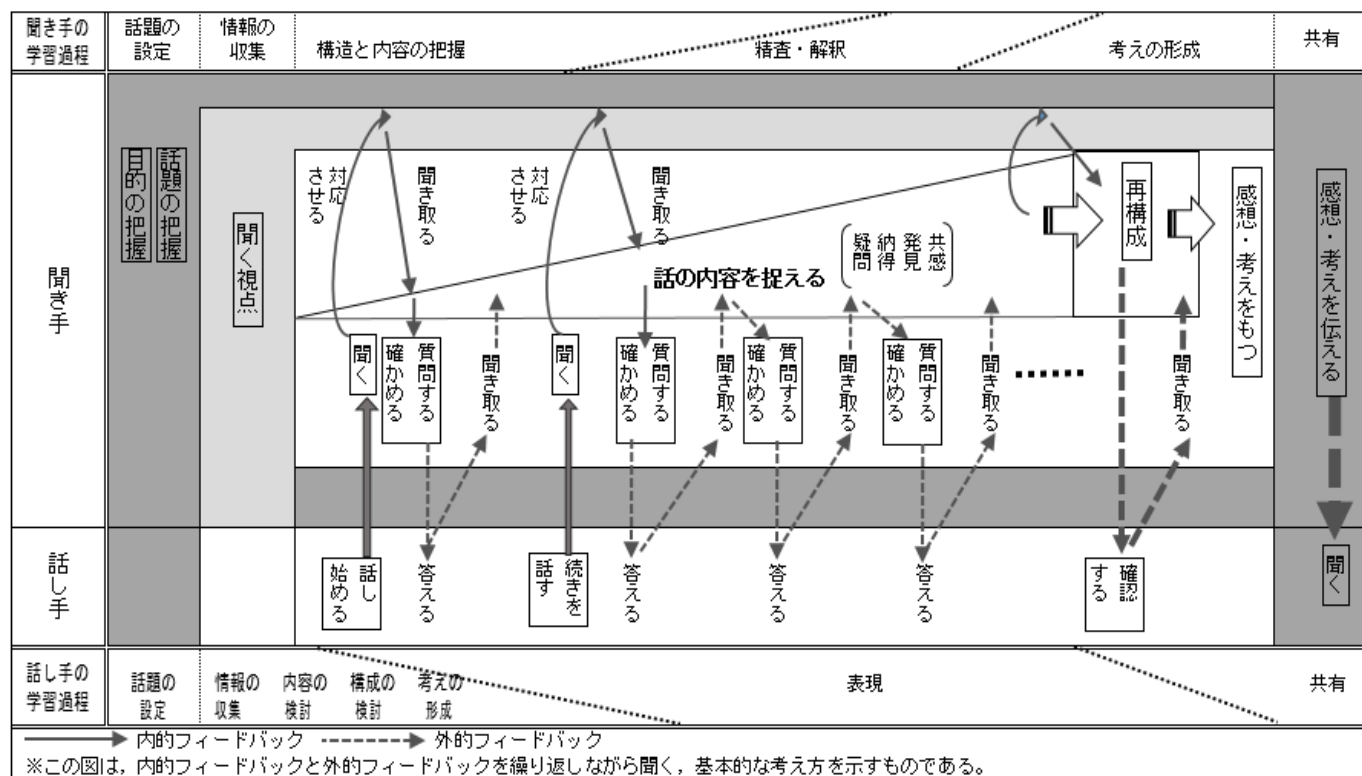


図4 相手の話を能動的に聞いているイメージ図

IV 「聞くこと」に焦点化してタブレット型端末を活用する単元づくりについて

1 相手の話を能動的に聞く力を育てるためのタブレット型端末の活用目的と活用方法

タブレット型端末の活用目的と活用方法を表3に示す。話し言葉は、一回性であるが故に、指導と評価の難しさがある。聞き手に、内的フィードバック、外的フィードバック、それぞれの方法を理解させたとしても、実際に聞く活動を行うとき、どこまでできているのか、どこでつまづいているのかを把握することは難しい。そのため、適切な指導ができているとは言い難い。タブレット型端末の活用により、この点の難しさを補うことができると考える。

表3 タブレット型端末の活用目的と活用方法

	使用者	活用目的	活用方法
指導のため	教師	学習材の提供	・話し手を動画で提示する
	児童	一人一台使用し、聞く視点と対応させながら話を聞く	・教師の話(動画)を、タブレット型端末を操作しながら聞く ・動画を停止したり、戻したりしながら、繰り返し聞く
	教師	学習材の提供	・外的フィードバックのモデル(良い例・悪い例)を動画で提示する
	児童	グループで一台使用し、協働して、聞き方を振り返る	・聞き手、話し手、撮影者の役割を交代しながら、話を聞く児童の姿を撮影し、外的フィードバックする様子を振り返る
評価のため	教師	児童の、学習の実現状況を把握し、指導方法の改善に生かす	・学習の様子を撮影し、児童の聞き方を評価する

2 「聞くこと」に焦点化した単元について

三浦和尚(2009)は、聞くことの学習指導の開発が進んでいないことを指摘し⁽¹²⁾、また、三浦(2016)は、聞くことの意識的系統的学習が必要であると述べている⁽¹³⁾。本単元では、話し手への指導は行わず、能動的に聞く力に焦点化して、指導を行う。図5に単元構想図を示す。

次	ねらい	学習活動(表はタブレット型端末の活用)												
一	話を聞く目的を理解し目的の達成に向けた活動を知る	理解する・目的「友だちのことを知り、より仲良くなるために話を聞く」を達成するために「相手が嬉しくなるような感想を伝える」活動を行う ・話を聞く目的を達成するためには、必要な聞く力があることを理解する 聞く・教師の話聞き取り、聞く視点を知る												
	内的フィードバックを繰り返しながら聞く力をつける	理解する・聞く視点と話の内容を対応させながら聞くことを理解する 聞く・話題に応じた聞く視点を持ちメモしながら聞く <table border="1"> <tr> <th>使用者</th><th>活用目的</th><th>活用方法</th></tr> <tr> <td>教師</td><td>学習材の提供</td><td>・話し手を動画で提示する</td></tr> <tr> <td>児童</td><td>一人一台使用し、聞く視点と対応させながら話を聞く</td><td>・教師の話(動画)を、タブレット型端末を操作しながら聞く ・動画を停止したり、戻したりしながら、繰り返し聞く</td></tr> </table>	使用者	活用目的	活用方法	教師	学習材の提供	・話し手を動画で提示する	児童	一人一台使用し、聞く視点と対応させながら話を聞く	・教師の話(動画)を、タブレット型端末を操作しながら聞く ・動画を停止したり、戻したりしながら、繰り返し聞く			
使用者	活用目的	活用方法												
教師	学習材の提供	・話し手を動画で提示する												
児童	一人一台使用し、聞く視点と対応させながら話を聞く	・教師の話(動画)を、タブレット型端末を操作しながら聞く ・動画を停止したり、戻したりしながら、繰り返し聞く												
二	外的フィードバックを繰り返しながら聞く力をつける	理解する・タイミングよく確かめたり質問したりすることや、再構成して確認することを理解する <table border="1"> <tr> <th>使用者</th><th>活用目的</th><th>活用方法</th></tr> <tr> <td>教師</td><td>学習材の提供</td><td>・外的フィードバックのモデル(良い例・悪い例)を動画で提示する</td></tr> </table> 聞く・内的、外的フィードバックを繰り返しながら聞く <table border="1"> <tr> <th>使用者</th><th>活用目的</th><th>活用方法</th></tr> <tr> <td>児童</td><td>グループで一台使用し、協働して、聞き方を振り返る</td><td>・聞き手、話し手、撮影者の役割を交代しながら、話を聞く児童の姿を撮影し、外的フィードバックする様子を振り返る</td></tr> </table>	使用者	活用目的	活用方法	教師	学習材の提供	・外的フィードバックのモデル(良い例・悪い例)を動画で提示する	使用者	活用目的	活用方法	児童	グループで一台使用し、協働して、聞き方を振り返る	・聞き手、話し手、撮影者の役割を交代しながら、話を聞く児童の姿を撮影し、外的フィードバックする様子を振り返る
使用者	活用目的	活用方法												
教師	学習材の提供	・外的フィードバックのモデル(良い例・悪い例)を動画で提示する												
使用者	活用目的	活用方法												
児童	グループで一台使用し、協働して、聞き方を振り返る	・聞き手、話し手、撮影者の役割を交代しながら、話を聞く児童の姿を撮影し、外的フィードバックする様子を振り返る												
三	学習したことを生かして、能動的に聞くことを楽しむ													

図5 単元構想図

第一次では、話を聞く目的を理解させ、目的を達成するために必要な聞く力があることに気付かせる。第二次では、第一次の学習内容を意識させながら、能動的に聞く力を２段階で身に付けさせ、内的フィードバック、外的フィードバックを繰り返しながら聞く力の定着につなげる。また、話題を「大事にしているもの」「楽しみなこと」とし、話題に応じた聞き方ができるようにする。第三次では、第一次と第二次の学習内容を活用しながら、児童同士で能動的に聞くことを楽しむ時間とし、定着を図る。

V 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

「聞くこと」に焦点化して、タブレット型端末を活用する単元づくりを行うことで、相手の話を能動的に聞く力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表４に示す。

表４ 検証の視点と方法

検証の視点		方法
1	相手の話を能動的に聞く力を付けることができたか	・事前、事後アンケート ・プレ、ポストテスト ・児童の書いたメモ ・聞き方振り返りシート ・児童の聞く姿(動画) ・振り返りプリント
2	「聞くこと」に焦点化して、タブレット型端末を活用する単元は、相手の話を能動的に聞く力を育てるために有効であったか ①指導のため ②教師による評価のため	

VI 研究授業について

研究授業の内容及び学習指導計画を表５に示す。

表５ 研究授業の内容及び学習指導計画

期間	令和２年12月7日（月）～12月17日（木）		
対象	所属校第2学年（1組21名）		
単元名	きく！きく！きく！～知ってそうで知らない、友だちのこと～		
重点を置く指導事項	話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。（思考力、判断力、表現力等A（1）エ）		
言語活動	知ってそうで知らないことを聞き出して、友だちと、もっとなかなくろう		
次	時	学習活動	
一	1	学習の見通しをもつ 聞く視点があることに気付く	
	2	視点に対応さ 大事にしているものについて視点をもち聞く	
二	3	せて聞き取る 楽しみなことについて視点をもち聞く	
	4	確かめたり質問したりする聞き方に気付く	
	5	聞き方を振り 確かめや質問の方法を掴んで聞く	
	6	返し改善する 話し手が嬉しくなる感想のもち方を掴んで聞く	
三	8	学習したことを生かし、友だちの話を聞くことを楽しむ	

VII 研究授業の分析と考察

1 相手の話を能動的に聞く力を付けることがで

きたか

(1) プレテスト・ポストテストによる分析

プレテスト、ポストテストでは、教師が話す内容について、児童がメモしたり、質問したりしながら聞く問題を作成し、実施した。話の内容を聞き取る段階、話の内容を再構成する段階、感想を伝える段階の三つの項目で評価している。評価方法は、児童のメモと、聞く姿（タブレット型端末で撮影した動画）による。なお、話の内容を聞き取る段階は、児童のメモに基づいて見取ることとする。ただし、メモしていなくても、再構成ができていれば、内的フィードバックを繰り返していると捉える。表６に基準、表７に結果を示す。

表６ プレテスト・ポストテストの基準

プレ	ポスト	能動的に聞く力	基準
話題「休みの日に楽しみなこと」		内容の聞き取り	A 内的フィードバックと外的フィードバックを繰り返して、表１に示す視点以上のことを聞き出している B 内的フィードバックと外的フィードバックを繰り返して、表１に示す視点について聞き取り、メモしている C 表１に示す視点について聞き取り、メモすることができていない
(内容) 好きなものをお店に行くこと	(内容) プールに泳ぎに行くこと	再構成	A 聞き取ったことに基づいて、話の内容を順序よくまとめている B 聞き取ったことに基づいて、話の内容をまとめている C 聞き取ったことに基づいて、話の内容をまとめることができていない
		感想	A 話の内容を捉え、自分の体験と結び付けて感想をもち、伝えている B 話の内容を捉え、感想をもち、伝えている C 話の内容を捉えた感想になっていない

表７ プレテスト・ポストテストの結果（n＝21）（人）

		ポストテスト			
プレテスト	内容の聞き取り	A	B	C	合計
		0	0	0	0
		0	3	0	3
		(a 児) 2	13	3	18
	合計	2	16	3	21
	再構成	A	B	C	合計
		0	0	0	0
		1	2	0	3
		(a 児) 3	10	5	18
	合計	4	12	5	21
	感想	A	B	C	合計
		1	1	0	2
		0	2	0	2
		(a 児) 4	9	4	17
	合計	5	12	4	21

表７に示すとおり、ポストテストにおいて、B評価以上の児童は、内容の聞き取りで18人（＋15人）、再構成で16人（＋13人）、感想で17人（＋13人）となっており、多くの児童が、相手の話を能動的に聞く力を付けたと言える。

(2) 授業における児童の変容

ア 内容の聞き取りに関わって

表７中のa児は、全ての項目で、ポストテストA評価へと変容した児童である。

a 児のメモを図 6 に示す。a 児の、プレテストのメモは、白紙であった。第 2 時のメモは、聞く視点と対応させて聞き取り、短い言葉でメモ

第 2 時のメモ			第 7 時のメモ		
だれ どうする	どうなる	どこで	だれ どうする	どうなる	どこで
友達にしている	つくし	少大生	だれ どうする	どうなる	どこで
		りよこ	だれ どうする	どうなる	どこで
		うが	だれ どうする	どうなる	どこで

図 6 a 児のメモ

している。第 7 時のメモは、a 児が自分で聞く視点を書き出し、話の内容を対応させて聞き取り、メモしている。メモの内容が増え、視点によって、単語でメモする、詳しくメモするなど、区別ができている。内的フィードバックと、外的フィードバックとを繰り返しながら話を聞き取ることに習熟していったことによると考える。

イ 再構成に関わって

a 児が再構成した内容を表 8 に示す。プレテストの再構成は、話題に触れただけであった。第 7 時は、メモに書いていない言葉を補いながら、話の内容が分かる再構成ができた。第 5 時以降、聞く活動の回数を重ねるごとに、聞き取ったことに基づいて、話の内容をまとめることができるようになった。この変容は、他の児童でも同様に見られた。

表 8 a 児が再構成した内容（稿者による文字起こし）

プレテスト	先生が、好きな食べ物のお店の話
第 7 時	大事にしている物は、泣ける生き物図鑑です。誕生日の日にお母さんに買ってもらいました。いろんな生き物が載っています。読んだり、兄弟で質問したりします。今は、勉強机の中にしまっています。親からのプレゼントだから大事にしています。

第 5 時以降の活動では、聞き手が、再構成して話し手に確認したところ、話の内容を捉えることができているという事実が気付き、どのような話の内容であったか、改めて話し手に質問するという状況が多く見られた。児童は、聞き方を改善する必要を実感しながら、改善につなげ、再構成することができるようになっていったと考える。

ウ 感想に関わって

a 児の感想を表 9 に示す。プレテストの感想は、話の内容を捉えた感想とは言えない。第 6・7 時は、話題を捉え、話の内容の全体を捉えた感想となった。さらに、第 7 時は、具体的に自分の体験と結び付けることができた。話を聞く目的を意識し、話の内容に対する話し手の思いを解釈できたこと

で、感想の質を高めたと考える。

表 9 a 児の感想

プレテスト	(話題「楽しみなこと」好きなものを食べに行くことの話) そのお店に行ってみよう。行けたら。
第 6 時	(話題「大事にしているもの」写真についての話) ぼくも、持っているの、気持ち分かります。
第 7 時	(話題「大事にしているもの」図鑑についての話) ぼくも、おばあちゃんから図鑑をもらったので、ぼくも、大事にしているの、大事にすることが分かります。

以上、ア、イ、ウの授業における児童の変容は、プレテストとポストテストの結果に結び付いており、多くの児童が、相手の話を能動的に聞く力を付けることができたと考える。

一方、ポストテストで、再構成と感想のいずれも C 評価の児童が 3 人いた。3 人に共通する点として、内的フィードバックに関係することとしては、聞き取っている視点が少ない上に、話の内容に合わせて詳しくメモすることができていない点、外的フィードバックに関係することとしては、質問が形式的で、分かるまで聞こうとする姿が見られなかった点が挙げられる。そのため、話の内容を断片的にしか捉えておらず、再構成や感想にはつながらなかったと考える。

2 「聞くこと」に焦点化して、タブレット型端末を活用する単元は、相手の話を能動的に聞く力を育てるために有効であったか

プレテスト・ポストテストにおける内容の聞き取り、再構成、感想の相互の関連を表 10 に示す。

表 10 内容の聞き取り、再構成、感想の相互の関連

プレテスト						ポストテスト					
内容の聞き取り	再構成					内容の聞き取り	再構成				
	A	B	C	合計			A	B	C	合計	
	0	0	0	0	0		1	1	0	2	
	0	2	1	3			2	11	2	15	
	0	1	17	18			1	0	3	4	
内容の聞き取り	感想					内容の聞き取り	感想				
	A	B	C	合計			A	B	C	合計	
	0	0	0	0	0		1	1	0	2	
	1	1	1	3			2	11	2	15	
	1	1	16	18			1	1	2	4	
再構成	感想					再構成	感想				
	A	B	C	合計			A	B	C	合計	
	0	0	0	0	0		3	1	0	4	
	1	1	1	3			1	10	1	12	
	1	1	16	18			0	2	3	5	

表 10 から、ポストテストにおいて、関連する項目の両方が B 評価以上の児童は、内容の聞き取りと再構成で 15 人（+13 人）、内容の聞き取りと感想で 15

人（+13人）となった。話の内容を聞き取ることができるようになったことで、再構成したり感想を伝えたりすることができるようになったと言える。

このことから、能動的に聞く力を育てるに当たっては、児童が話の内容を適切に聞き取るために、内的フィードバック、外的フィードバックをすることができるようになることが重要であると言える。そのための有効な手立ての一つとして、タブレット型端末の活用があると考えます。

(1) 指導のため

ア 繰り返し話を聞くことについて

表6中の内容の聞き取りのB基準を細分化して表11に示し、その内訳を表12に示す。B2の方が、話し手が知らせたいことの内容を捉え、より適切に聞き取っている状態にあると考えます。

表11 「内容の聞き取り」B基準の詳細

B1	表2に示す視点について聞き取り、メモしているが、話の内容と比べ、不十分である
B2	表2に示す視点について聞き取り、話の内容が分かるように、過不足なくメモしている

表12 「内容の聞き取り」B基準の児童の内訳

	プレテスト	繰り返し聞く		他者の話を聞く (3回目)	ポストテスト
		1回目	2回目		
B1	3	7	11	5	10
B2	0	1	8	14	6

表12より、プレテストの段階では、B1評価の児童が3人いる。タブレット型端末で、繰り返し話を聞く段階の1回目と2回目を比較すると、B1、B2ともに増加した。多くの児童が、聞く視点と話の内容を対応させて、メモしながら聞き取ることができるようになった。その要因として、内的フィードバックと、聞き洩らしたことがあれば動画を戻して聞く、小さな外的フィードバックとを繰り返しながら話を聞くことができたこと、一人一台のタブレット型端末の活用で、全員が、理解に応じて自分のペースで話を聞くことができたことが挙げられる。

学習後の児童の振り返りには、「昨日は、ちょっとしか書けなかったけど、今日はどうするがいっぱい書けた。」「気持ちができなかったのに、今日はけっこうできました。うれしかったです。」とあり、繰り返し聞くことの効果を、児童も実感していることが分かる。

以上のことから、タブレット型端末で繰り返し話を聞くことは、内的フィードバックの定着を図るのに有効だったと考える。

イ 聞き方を振り返ることについて

第5・6・7時では、他者の話を聞き、聞く姿をタブレット型端末で撮影、聞き手が外的フィードバックする様子を、グループで評価した。この活動を一人2回ずつ行っている。

この学習の1時間目は、振り返ること自体に難しさがある児童や、撮影した聞き手の姿をどう見ればよいか分からない児童が見られたため、聞き方振り返りシートを準備し、表13に示す評価項目について、動画で確認しながら振り返らせた。学習後には、教師も、動画と児童による評価を照らし合わせ、評価した。

表13 振り返りの評価項目と評価の例

		評価項目	評価の例
視点		聞いたほうが分かることはどれか考えて、聞く視点をメモ用紙に書いている	◎ 聞く視点到理由と気持ちがある
			○ 聞く視点をメモ用紙に書いている
			△ 聞く視点をメモ用紙に書いていない
確認・質問	①	話の内容に関係する質問をしている	◎ 関係する質問を2回以上している
			○ 関係する質問を1回はしている
			△ 質問の必要があるのに、質問していない、もしくは関係ない質問をしている
	②	聞く視点の中にメモしていないことがあれば、質問している	◎ 質問して、全ての視点についてメモしている
			○ 質問して、メモしている
			△ 質問して、メモできていない
再構成		話の内容をまとめている	◎ 話の内容を順序よくまとめている
			○ 話の内容をまとめている
			△ 話の内容をまとめることができていない
感想		話した人が、嬉しくなるような感想を伝えている	◎ 自分の体験と結び付けて、感想を伝えている
			○ 話の内容について感想を伝えている
			△ 話の内容について感想を伝えていない

振り返りの一回目の評価が、△だった児童の、二回目の評価をまとめ、表14に示す。

表14 振り返りの評価

振り返りの評価項目	一回目	二回目		
	△	◎	○	△
視点	8	7	0	1
質問①	8	5	2	1
質問②	7	3	2	2
再構成	14	2	10	2
感想	17	6	4	7

各項目とも、一回目は、△の児童が多い。外的フィードバックしながら聞くことについて学習した直後は、児童は「自分にもできる」と自信をもっていた。しかし、タブレット型端末で振り返ると、実際にはできていないことに気付いた。児童にとって、理解したことをできることにするためには、客観的に振り返る手立てが有効だったと言える。

再構成の一回目では、再構成することを忘れる児童や、どうまとめたらいかが分からず、首を傾げる児童がいた。再構成できなかったことを動画で確認後、「(メモを)もっと詳しく書けばよかった。質

問すれば、もっと詳しく書けた。」と、メモの必要性に気付く児童が見られた。感想の一回目では、グループで振り返る時、撮影者が、話し手に対して「〇〇さんは、（感想を聞いて）嬉しかった？どうだったか覚えとる？」と問いかける場面があった。声をかけた児童は、感想の述べ方を意識できつつあると言える。グループでの振り返りは、聞き手自身が、外的フィードバックする様子を直後に客観視できる点と、話し手と撮影者が、それぞれ自分の聞き方に生かせるという点で効果的であったと言える。

また、表7中の、感想について、ポストテストの結果が伸びた児童は13人だった。この13人に共通することは、一回目で改善する必要があると評価した項目を、二回目で確実に改善していることである。振り返りの記述欄には、「もうちょっとメモしたら感想が言えた」「質問をもっと詳しくすれば感想ができる」とあり、児童は、何をどう改善したらよいかについても考えていたことが分かる。

以上のことから、聞き方を振り返るために、動画で確認することが、客観的、視覚的な手立てとなり、児童が改善すべき聞き方に気付き、それが改善につながったと言える。タブレット型端末で聞き方を振り返ることは、外的フィードバックの定着を図るのに有効だったと考える。

(2) 教師による評価のため

これまでの「聞くこと」の学習では、授業で、一人一人の学習状況を確実に把握できていたとは言い難い。特に、グループでの活動では、机間巡視や、ビデオカメラ等での撮影をしていますが、一部の児童の状況しか見取ることができていなかった。

本単元では、グループごとに撮影した動画があったため、一人一人の学習状況を確実に把握することができた。それにより、指導方法を具体的に工夫することができ、誰にどのような支援が必要かを分かって、個別に対応することができた。また、これまでの聞き取った内容のみを問うテストとは違い、聞き方まで見取ることができ、児童の聞く力を適切に評価できたと言える。

以上のことから、教師による評価のためのタブレット型端末の活用は、有効だったと考える。

Ⅷ 研究のまとめ

1 研究の成果

「聞くこと」に焦点化してタブレット型端末を活用する単元は、内的フィードバックと外的フィード

バックを繰り返しながら、相手の話を能動的に聞く力を育てることに有効であると明らかになった。

2 研究の課題

- 再構成することと、再構成から感想につなげる段階で、更なる指導の工夫を行えば、感想の質をより高めることができると考える。具体的には、再構成する前にメモを見直し、必要があれば、さらに外的フィードバックをして、納得できるまで話を聞き出す経験を積ませることと、メモとして分割した情報をまとめ、捉え直すことを意識的にさせる必要がある。また、感想の質を高めるために、話の内容と自分の体験との共通点を見いださせ、その中から、相手に伝えることを選ばせるような指導が必要である。
- 能動的に聞く力を活用し、他者と協働して課題を解決する対話につなげるためには、話を聞く目的と話題に応じて、聞く視点、メモの内容、質問の内容などを変える必要があり、国語科に限らず、多様な場面での意図的な指導を継続する必要がある。

【注】

- (1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』東洋館出版社p. 1に詳しい。
- (2) 文部科学省（平成29年告示）：『小学校学習指導要領』pp. 30-36に詳しい。
- (3) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』東洋館出版社p. 29に詳しい。
- (4) 村松賢一（2004）：『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習—理論と実践—』明治図書pp. 36-37に詳しい。
- (5) 村松賢一（2004）：前掲書pp. 37-38に詳しい。
- (6) 植西浩一（2015）：『聴くことと対話の学習指導論』溪水社p. 31に詳しい。
- (7) 桂聖（2010）：『子どもと創る国語の授業』全国国語授業研究会編東洋館出版社pp. 49-51に詳しい。
- (8) 辻村敬三（2019）：『国語科内容論×国語科指導論』東洋館出版社p. 3に詳しい。
- (9) 三浦和尚（2016）：『国語教育実践の基底』三省堂p. 131に詳しい。
- (10) 辻村敬三（2019）：前掲書p. 37に詳しい。
- (11) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 28に詳しい。
- (12) 三浦和尚（2009）：『国語科教育実践・研究必携』学芸図書pp. 86-87に詳しい。
- (13) 三浦和尚（2016）：前掲書pp. 128-129に詳しい。

【引用文献】

- 1) 山本修（1994）：『聞くことの指導』高橋俊三編著明治図書p. 18
- 2) 村松賢一（2004）：『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習—理論と実践—』明治図書p. 37
- 3) 植西浩一（2015）：『聴くことと対話の学習指導論』溪水社p. 34
- 4) 山元悦子（平成22年）：『新訂国語科教育学の基礎』溪水社p. 235
- 5) 安直哉（2019）：『小学校国語科教育研究』東洋館出版社p. 98